

Symposium II: 玄奘三蔵の築き上げた唯識の教義と実践、 そしてその日本的展開

玄奘三蔵の漢訳文献から見るインド唯識と中国唯識

佐久間 秀範

玄奘三蔵は多くの文献を漢訳している。その多くはインド瑜伽行唯識文献の原典にかなり忠実に訳されている。ところが特に『摂大乘論無性釈』『仏地経論』の論典に関しては、事情が異なる。両文献にはチベット語訳が残されており、そのチベット語訳がサンスクリット語原典を忠実に再現していると思えば、玄奘訳は原典に対してかなりの増広ないし改変が見られることになる。さらに『成唯識論』は、先の二つの玄奘訳で増広された内容がより精密に体系化されている。『成唯識論』には、現存するサンスクリット語諸文献を原典として特定できないが、サンスクリット語原典の現存する『唯識三十頌』のスティラマティの註釈と比較対照すると、意外な点で符合する。スティラマティには『大乘莊嚴経論』の註釈がチベット語訳で残されており、その内容が中国唯識教学の正当説と近いことが判っている。このスティラマティが安慧と同一人物とすると中国唯識教学が主張する安難陳護一三四と矛盾する。このような点を考慮すると、玄奘三蔵は中国において新たな教学を築いたと見做すことができる。この展望に立って、中国唯識の教義とインド唯識の教義とを比較考察する。

中国唯識教学を継承し現在まで保存している日本法相教学では、止と観とを基礎とする実践は見られなくなり、論義という形を修行の中心としている。玄奘自身は、愛弟子の道昭に「日本に禅を伝えよ」と言ったとの伝承があるので、インド以来の唯識観法という修行法を行っていた可能性が高い。この伝承を基に唯識観法という実践内容が中国唯識教学でどのようなものであり得たかを考えることにする。さらに現代まで中国唯識教学を継承し保存している日本法相宗の論義との関係の考察に繋げて行く糸口を探ることにする。

敦煌莫高窟の仏龕表現にみる玄奘三蔵の仏国土観

—唐代維摩経變を手がかりに—

濱田 瑞美

敦煌莫高窟の各窟内は塑像や壁画によって仏世界が鮮やかに表現されている。人々は窟内の塑像や壁画を観ることで、仏世界をよりリアルに実感することができる。なかでも正面龕内の本尊仏は主たる礼拝対象であり、窟内は宗教実践の場として機能したとみられる。

初唐期の莫高窟では、正面仏龕内に置かれた仏・菩薩・弟子などの塑像の背後、すなわち龕内壁面に菩薩や弟子の画像が描かれることが一般的である。しかし、菩薩・弟子らに加え、維摩詰と文殊菩薩など維摩経に基づく絵画：維摩経變を龕内に描く作例が現状5件確認され、それらはいずれも7世紀後半の作とされている。唐代の維摩経變の多くは窟内周壁に描かれているが、注目されるのは、龕内の維摩経變には他壁のそれらとは異なる図像的な特徴があること、および玄奘訳『説無垢称経』に依拠する尊名題記が認められることである。敦煌の他の唐代の維摩経變は、壁画題記から鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』に依拠することが判明しているが、その事実を踏まえるならば、龕内の維摩経變の図像の特徴的な表現は、依拠する訳経の違いに由来する可能性が高い。

本報告では、龕内にあらわされた維摩経變の特徴的な図像について、玄奘訳『説無垢称経』による解釈を試み、従来未比定の図像の一部が同経「菩薩行品」に依拠するという新見解を提示する。加えて、維摩経所説の唯心浄土説が、玄奘や基（窺基）による法相唯識の仏国土観の變化土の根拠とされることを踏まえ、維摩経變および本尊釈迦仏像をあらわす龕内全体の図像について、唯心浄土と菩薩行との関連から読み解いていく。これらの図像の検討を通じて、唯識による仏国土の思想が、敦煌初唐期の仏教石窟という実践空間において如何様に表現されたかについて考察する。

中国唯識における教理と実践

吉村 誠

インド瑜伽行派の文献は5世紀には中国に伝来し、その漢訳を所依とする中国唯識諸学派—地論学派・摂論学派・唯識学派—が6-7世紀にかけて展開した。従来の研究では、それぞれの学派の「教理」の解明が進められてきたが、それらの教理に基づく「実践」については十分に検討されてこなかった。そこで、本報告では、中国の唯識学派における教理と実践の関係について、以下の二つの事例から考えてみたい。

第一に、玄奘（602-664）が翻訳した文献に見られる唯識の実践についての記述である。玄奘が帰国直後に翻訳した『解深密経』や『摂大乘論』には、唯識思想に基づく瑜伽行や六波羅蜜行が詳述されている。これに対し、玄奘が晩年に翻訳した『成唯識論』では、それらの説明は簡素なものとなっている。この記述の差異が、唯識学派に実践よりも教理を重視する態度を促し、日本の法相宗にも影響を及ぼしたのではないかと推測する。

第二に、玄奘の高弟、慈恩大師・基（632-682）の著作に見られる五重唯識説である。基は『大乘法苑義林章』と『般若波羅蜜多心経幽賛』のなかで、五つの次第で唯識を観察する方法を述べている。そこでは三性説や四分説などの唯識思想が、菩薩が悟りを得るための観法として明確に位置付けられている。これは唯識学派において教理と実践の融会がなされた証拠である。日本の法相宗ではこれが五重唯識観として発展した。

このように、中国の唯識学派では、瑜伽行の前提となる唯識の教理に主たる関心が寄せられる一方で、複雑に発展した教理を観法として体系化する努力もなされていた。この傾向は日本の法相宗の教理と実践の関係にも反映されているように思われる。

日本法相宗の修行実践と学問研鑽

袁輪 顕量

日本に仏教が伝播したのは六世紀半ばであるが、本格的な受容は六世紀後半から始まる。その受容には修行実践と学問研鑽の二つの方面が存在した。学問研鑽の研究は古く七世紀から三論が、同世紀末からは法相も研鑽されるようになった。

修行実践の上で重要な役割を果たしたのは法相の道昭である。彼は直接に玄奘に師事したと伝えられ、禅観を日本に伝えた。彼の法系に行基そして道鏡が存在するが、いずれも禅観に秀でたとの伝承が存在する。兩人ともに靈異が多いと伝承されるのであるが、それは行に裏打ちされたものと推定されるのである。

また九世紀初頭には天台の最澄と法相の徳一の間で交わされた諍論が教学的な研鑽として有名であるが、この諍論はやがて論義に展開したと考えられる。その資料の中にも天台と法相の修行実践が彷彿されるものが含まれている。その後、法相宗は教学面のみが注目されていくが、平安時代後期には興味深い修行法も創始していた。法相宗に焦点を当てて修行道の実践と学問研鑽の展開を考察する。

実践修行としての教学研鑽

—慈恩会堅義とその前加行の意義を考える—

ザイレ 暁映

玄奘門下の築き上げた唯識教学を継承し、三論宗と華嚴宗と共にいわゆる南都仏教を代表する法相宗は、日本仏教の中でも教学研鑽を重視する宗派として広く知られている。特に、平安後期に形成され、鎌倉時代に最盛期を迎えた論義の研鑽は、法相宗の代々の学侶の中心的な宗教的活動であり、論義の研鑽以外の仏道実践（修行）の形跡が殆ど見当たらないのは、日本法相宗の最大の特徴の一つであると言える。

論義研鑽の中でも特別な位置を占めるのは、教学の口頭試験である「堅義」である。様々な論義法会に設けられていた堅義に向けての講義と伝授、集中的な勉学期間である前加行、そして堅義終了後の結果分析の繰り返しこそ、平安時代からの法相宗の学侶の日常生活であったと言っても過言ではない。

法相宗の伝統的な教育制度は明治初期の廃仏毀釈・神仏分離の影響で絶えてしまったが、明治二十九年に復興された論義法会の慈恩会と共に慈恩会の堅義とその前加行も再興され、現在に至るまで法相宗の本山僧に勤修され続けてきた。

法相宗は現在も論義の暗記という伝統に強く拘る宗派である。堅義において所立義名（主張命題）だけではなく、その外にも膨大な量の論義を暗記し続ける僧侶は今もなお「聞思修慧」などのような教義をもって、堅義における教学研鑽を実践修行に向けての勉強（方便）ではなく、勉学そのものを実践修行と見なしている。この姿勢は、一生を学問に懸けた昔の学侶の生き方、世界観、そして仏道観を解明するための大切な手掛かりとなると思われる。

発表者は令和元年に慈恩会堅義を遂業したが、本報告ではその際の修行体験を踏まえて、現在興福寺で行われる堅義の具体的な修行内容を紹介し、論義研鑽の宗教的な意味や堅義における教学と修行との関係について考えてみたい。